

2010年(平成22年)8月6日
第2回土木と学校教育フォーラム

『国土教育』の視点から見た
社会科教科書の検証と次世代教育論
ー 歴史の深層としての「国土」、その構造と未来への展望 ー

(財) 国土技術研究センター

森田 康夫

研究の背景とねらい(国土学のブランチ、エピソード)

現在、われわれが享受している豊かで安全な生活は、われわれのご先祖様が農業基盤や交通基盤を整備し、川を治め、水資源を開発するなど、絶え間なく国土に働きかけることによって、国土から恵みを返してもらってきた歴史の賜物である。

従って、現代に生きるわれわれの世代も、国土に対して働きかけを続け、将来世代に対して、より良い社会基盤を引き継いでいかなければならない。そのためには、われわれ日本人の国土への働きかけの歴史について、また世界の国々の国土への働きかけの成果や現在の努力について、不断に学び続けることが求められている。

- わが国の小中高等学校教育では、社会科(地理歴史科)の教育内容はどうなっているのか？
- 日本という国家を担っていくために必要な知識・教養を学ぶことは出来ているか？
- 改善の方向性は？
(フランス・アナール派の「歴史地理学」と『国土教育』)

柳田国男監修の社会科教科書(小6)最終稿

みんなが幸福になれるように

世の中のおおぜいの人の幸福や利益のためにもうけられていたものが、公共しせつです。社会には乳児院やたく児所や養老院などのほか、いろいろな公共しせつがあります。つぎの表は、そのおもなものです。

健康、安全	保健所、病院、水道、下水、警察署、消防署、火の見やぐら、公衆浴場など
交通、通信	鉄道、バス、駅、道路、橋、郵便局、ポスト、公衆電話、電柱、道路標識など
教育、レクリエーション	学校、公民館、図書館、博物館、美術館、動物園、植物園、遊園地、公園など

これらのなかには、知っているものがたくさんあるでしょう。それはどれとどれか、それが私たちの生活にどのように役だっているか、話しあってみましょう。むかしにくらべると、今はこういうしせつがずいぶんとのつています。しかし、まだこれでじゅうぶんだとはいえません。公共しせつがもっとりっぱになれば、それだけみんなが幸福になれるのです。

公共しせつについてだいじなことをきめるのは、国や地方の議会です。議会では公共しせつのほかにも、みんなを幸福にするための、いろいろなきそくやしくみをきめます。だから、国民の一人一人がものごとを正しく判断できる力を身につけて、りっぱな議員を選挙することがたいせつなのです。

社会の役にたつ人間になるためには、私たちがこれから勉強しなければならぬことがたくさんあります。

青少年の意識調査の国際比較

■「高校生の意欲に関する調査」(2006年・秋)

- 「暮らしていける収入があればのんびりと暮らしていきたいと思う」

⇒ 米国13.8%、中国17.8%、韓国21.6%、日本42.9%

- 「偉くなりたいと思う」

⇒ 米国66.1%、中国85.8%、韓国72.3%、日本44.1%

■「中学生・高校生の生活と意識に関する調査」(2008年・秋)

- 「私の参加により、変えてほしい社会現象が少し変えられるかも知れないと思う」

⇒ 中学生で、米国53.3%、中国58.3%、韓国66.5%、日本37.3%

高校生で、米国69.8%、中国62.7%、韓国68.4%、日本30.1%



- 「自分はダメな人間だと思う」

⇒ 中学生で、米国14.2%、中国11.1%、韓国41.7%、日本56.0%

高校生で、米国21.6%、中国12.7%、韓国45.3%、日本65.8%



学習指導要領の変遷(小中学校社会科)

- 昭和22年度版(試案) ⇒ 「問題解決学習」「生活単元学習」主体で、多くの時間が配当された。
〔 GHQによって戦後禁止されていた修身・歴史・地理が、新教育制度発足とあわせ「社会科」として再生。 〕
- 昭和30年度版 ⇒ 単元学習から系統性重視へ
- 昭和33年10月施行 ⇒ 系統性を重視したカリキュラム、「道徳」の特設
- 現代化カリキュラム(S46・47施行) ⇒ 戦後最高レベルの濃密な学習指導要領
- ゆとりカリキュラム(S55・56施行) ⇒ 授業時数と指導内容が大幅に削減
- 旧指導要領(H4施行) ⇒ 小学校1・2年の社会科が廃止され、「生活科」が創設
- 現行指導要領(H14施行) ⇒ 学校完全週5日制の下、「総合的な学習の時間」が創設

小学校・社会科教科書と国土教育①

■ 授業時間数の減少(「現代化カリキュラム」→「現行」で1/3削減)

- 昭和46年施行指導要領：小4～6年の社会科授業時間合計で**420時間／3年**
- 平成14年施行指導要領：小4～6年の社会科授業時間合計で**275時間／3年**

■ 『国土(郷土)を開発してきた先人達の努力』—小学4年生—

- 昭和45年検定教科書：「**開発のむかしといま**」という単元で46頁
(東京書籍)

- ・ 相模原台地の新田開発・ダム
- ・ 箱根用水
- ・ 高浜山の砂防林(出雲市)
- ・ 天竜川の堤防
- ・ 八郎潟の干拓
- ・ 高速道路、観光道路、住宅用地、水道等々

「**交通の発達**」という別単元で46頁

- ・ 江戸時代以降の交通の歴史(道路、水運)
- ・ 鉄道整備の歴史と鉄道網
- ・ 鉄道をしく苦心(トンネル、橋梁)
- ・ 交通の発達と産業への影響等

- 平成16年検定教科書：「**大河原用水(八ヶ岳山麓)の開発**」について14頁

➡ **現在の小学生と三十数年前の当時のわれわれとは、
圧倒的に国土への働きかけに関する学習量が違う**

小学校・社会科教科書と国土教育②

■『私たちの生活と情報』—小学5年生—

- 昭和27年検定教科書：小学6年生の教科書にマス・メディアを批判的に読み解く勧めがあった
- 昭和45年検定教科書：(記述無し)
- 平成16年検定教科書：コマーシャルやテレビ・新聞報道を取り上げ、更に誤った報道事例や過熱取材の例を参考資料として掲載し、これらマス・メディア情報を如何に活用するか、またどう読み解くかについてコメント

➡ 国土への働きかけが如何にあるべきか(程度・対象・手段などは、主権者である国民一人一人が判断しなければならない事項。

そのためにも、メディア情報を鵜呑みにせず、主体的に読み解いて活用する能力を持たなければならない
(メディア・リテラシー教育の必要性)

世界各国における組織・制度への信頼度(2000年)

新聞・雑誌

軍隊

警察

国連

労働組合

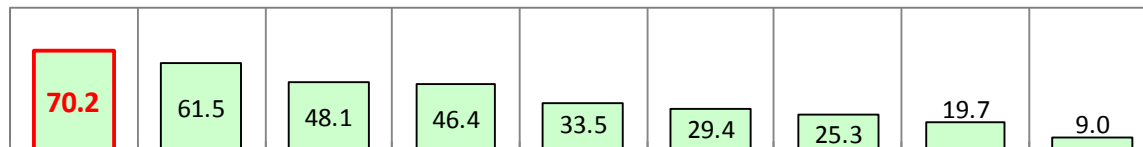
行政

大企業

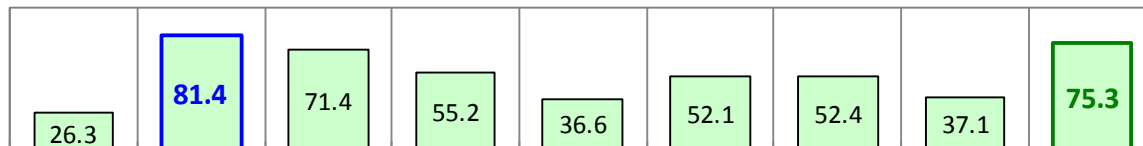
国会

宗教団体

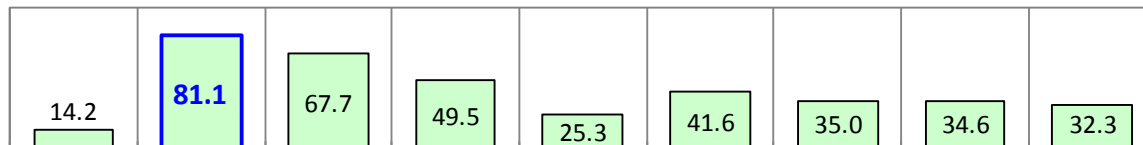
日本



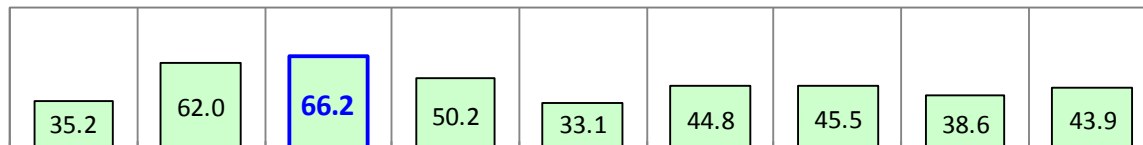
米国



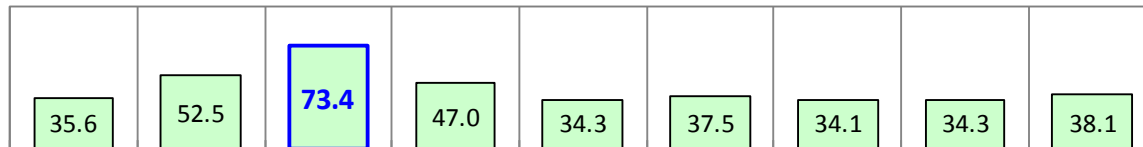
英国



フランス



ドイツ



国	新聞・雑誌
日本	70.2%
米国	26.3%
英国	14.2%
フランス	35.2%
ドイツ	35.6%

(注) 各国の全国18歳以上男女1,000サンプル程度の回収を基本とした意識調査の結果である。数字は各組織・制度に関し「非常に信頼する」と「やや信頼する」の回答率の合計。各組織・制度は日本の信頼度の高い順に並べた。軍隊は日本の場合、自衛隊についてきている。

(資料) 電通総研・日本リサーチセンター編「世界60カ国価値観データブック」

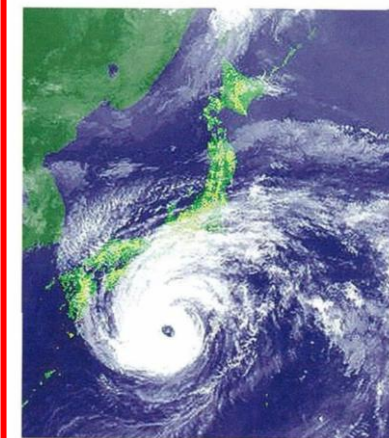
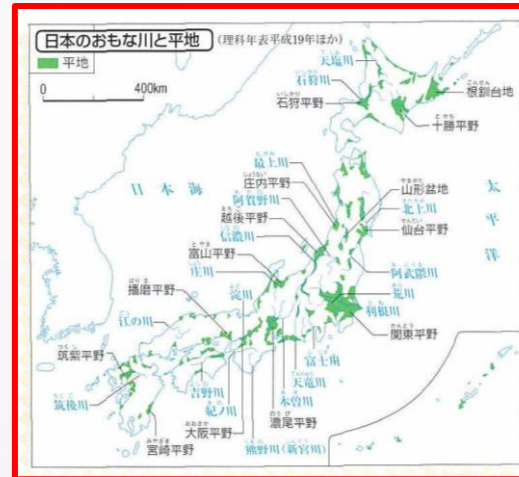
中学校「地理分野」教科書と国土教育①

- 昭和30年の学習指導要領以降、地理分野の検定教科書の学習項目・内容はほとんど変わっていない
- ➡ わが国の国土・自然条件(火山や地震が多い、平野が狭い、川が急で短い、台風が来る等)については、いずれの時代の教科書においても、学習可能

第1章 さまざまな面から見た日本



世界と日本の自然環境



夏季の衛星画像(2002年8月18日) 発達した台風をはっきりと確認することができます。

中学校「地理分野」教科書の例(東京書籍)



1970年の鹿沼インター
チェンジ周辺(栃木県)



茨城県、栃木県、群馬県の人口の移り
変わり(国勢調査報告)

5 交通が もたらす 地域の変化

交通網が整備されると、
地域の産業やわたしたち
の生活はどのように変化
するのでしょうか。

交通の発展がもたらした地域の変化
交通網の整備は、地域間の結びつきを
強めます。その地域の産業やその地域
に住む人々の暮らしにさまざまな影響をあたえ、その地域
を変化させます。そのようすを、関東平野の北部の地域を
例に考えてみましょう。

北関東地域は、一部では古くから織物業がさかんに行わ
れてきましたが、多くは農業中心の地域が広がっていました。
そうした地域に、1970年代以降、東北自動車道や関越
自動車道、東北新幹線、上越新幹線などがあいついで開通
しました。そこで地元の自治体などは、工業団地をつくる
などして、積極的に工場を誘致しました。

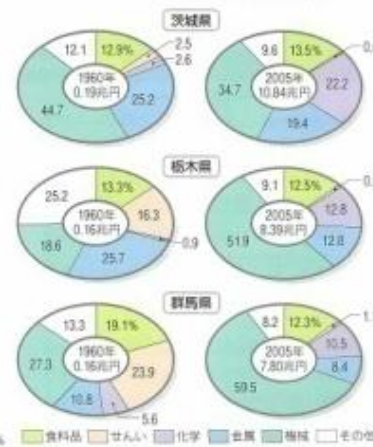
この結果、京浜工業地帯から北関東に移転する工場など
が多くなり、この地域の人口も増えました。新幹線や高速
道路により首都圏からの移動時間も短縮され、住宅地やゴ



*第三次産業には分類不能もふくむ。



茨城県、栃木県、群馬県の産業別人口の移り変わ
り(国勢調査報告)



茨城県、栃木県、群馬県の工業生産額とうちわけの
移り変わり(全事業所)(工業統計表各年版)

ゴルフ場などのレクリエーション施設の進出地域としても
注目されるようになりました。

ためしてみよう

●北関東の例や、203ページの「地理にアクセス」を例にして自
分がくらす都道府県やその周辺で、新しく開通した道路やトン
ネルなどに注目し、同じような視点で地域を調べてみましょう。



1998年の鹿沼インター
チェンジ周辺(栃木県)



茨城県、栃木県、群馬県の工業生産額とうちわけの
移り変わり(全事業所)(工業統計表各年版)

野菜の森などを見て、生
産地を地図の上にあわせて
みましょう。

中学校「地理分野」教科書と国土教育②

- 「現代化カリキュラム」の昭和46年検定教科書と、現行の平成17年検定教科書を比較すると、**全体頁数は2/3に削減**
(本文323頁→215頁)
 - 「現代化カリキュラム」では、日本の地誌、世界の国々の地誌を系統的・網羅的に学習することができたのに対して、**現行教科書では、ごく一部の地誌しか学ぶことができない**
 - 例えば、世界の地誌については、アメリカ、中国、フランスについてはしっかり学べるが、あとはブラジル、マレーシア、オーストラリア、ガーナについて補足的に学べる程度
- ➡ **いずれの時代においても、中学地理教科書は重要な『国土教育』の材料であるが、教科書記載分量及び授業時間数の大幅削減により、十分な思考が深まっていけない学習環境へ**

中学校「歴史分野」教科書と国土教育(現在)

- **現行の歴史分野教科書では、わが国の歴史上の事象や人物・文化遺産等を中心に「事件史・出来事史」が取りまとめているため、国土形成の歴史や社会資本の役割や効果、社会資本整備に携わってきた人々の苦労など「国土教育」に関する記述は極めて限定的**

- 例えば、灌漑用ため池整備、平城京建設、行基のみちぶしん、太閤検地、五街道整備、新田開発、鉄道開通、・・・

- **いくつかの例外(国土教育面から見た好事例)**

- テーマ学習欄において、『近代化遺産の価値』を取り上げ(日本文教出版)
- 人物コラム欄において、『台湾の開発と八田與一』を取り上げ(扶桑社)

➡ **「国土教育」を学ぶ材料として、現行の歴史分野教科書に効果的な役割を期待することは難しい**

中学校「歴史分野」教科書と国土教育(昭和20年代)

■ 単元学習の時代の教科書(昭和27年検定)

- 「都市や村の生活はどのように変わってきたか(中学2年・単元Ⅰ)」
= 約100頁
- 「世界の諸地域はどのように結びついてきたか(中学1年・単元Ⅳ)」
= 約100頁

⇒ 都市や村の形成の歴史、これらを結びつける交通の発達の歴史、海外の都市形成・交通発達の歴史との比較 等

➡ 戦後、昭和20年代の教科書で授業を受けた者は、長年の国土への働きかけの努力が結実した「現在の国土」をどう改善して次の世代に渡すのかについて、思いをはせることが可能であった。
また、世界をも視野に入れた自立した物差しで考えることができたのではないか。

中学校「公民分野」教科書の内容の変化①

■ 家庭教育の扱いが極めて小さくなった

- 昭和27年検定教科書：「**学校生活**」について約40頁、
「**家庭生活**」について約30頁
- 平成17年検定教科書：『**個人と社会生活**』という1節の中で、**実質2頁弱**

■ 政府(行政)や公務員の役割が小さくなった

- 昭和27年検定教科書：「**政府や公務員の役割**」について約25頁
うち、「**国の実施する社会資本整備関係記述**」
のみで約2頁
- 平成17年検定教科書：「**行政**」について9行、「**公務員**」について7行

■ 自由主義から平等主義へ

- 昭和27年検定教科書：「**自由主義**」を中心として約90頁
- 平成17年検定教科書：「**自由権**」について2頁、「**平等権**」について6頁

中学校「公民分野」教科書の内容の変化②

■ 文化・芸術や宗教知識教育の空洞化

- 昭和27年検定教科書：「文化」全体で168頁
(うち「宗教」「芸術」「科学」各約50頁)
- 平成17年検定教科書：いずれも数行の世界

➡ 戦後、自立すら許されなかった時代でさえ、これだけの学習指導要領や社会科教科書を作って、次の世代の国民の教育に力を注いだ先人達の努力を、現世代のわれわれは今こそ見つめ直すべきではないか。

次の世代に引き継ぐべき公民教科書は、半世紀以上前に出版されたこの昭和27年度版教科書ではないか。

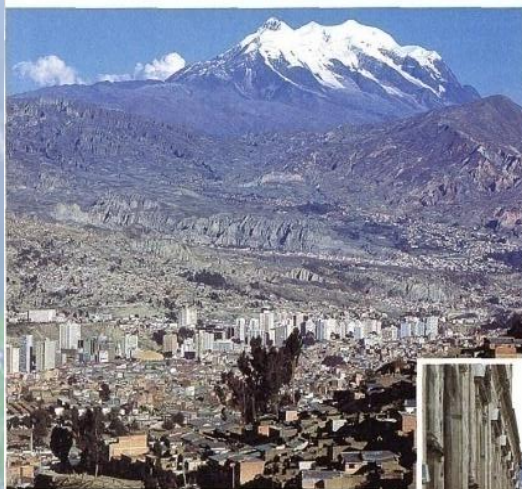
現行高等学校「地理B」教科書の例(帝国書院)①

1 章 自然環境と生活

1 節 生活の舞台としての地形

私たちの生活は、環境としての自然から直接・間接の影響を受けている。たとえば山地は、人間や物資の交流を妨げることが多いため、しばしば民族や文化の境界となり、国境や行政区にも採用されてきた。海は交通路として役だつので、海岸線の出入りの程度も、住民の生活や文化に関係が深い。

世界には、けわしい山地もあれば、低くて平らな平原もある。さまざまな環境のなかで、人々は自然の恵恩にあずかり、またときには自然災害に見舞われながらも、くふうを重ねてくらしを営んできた。そのような人々の生活と自然のかかわりには、自然環境の違いによってどのような特徴がみられるのだろうか。まずは、特徴のある地形と生活のかかわりについてみていこう。



▲① ラバスの街なみ(ボリビア, 1987年撮影) ラバスは、アンデス山脈の谷間に位置し、世界で最も標高の高い首都である。4000mをこえる高所にあるため、旅行者が高山病にかかることもある。

▶② 坂が多いラバスの街かど(ボリビア, 1988年撮影)



山地に住む
人々の生活
—アンデス山脈—



▶③ アンデス山脈の高地でのじゃがいも栽培(上, ペルー)とさまざまな種類のじゃがいも(下) アンデス山脈では、盆地や谷間はもとより、山の急斜面にまで耕地が広がられており、じゃがいもやとうもろこしなどが栽培されている。



◀④ 標高によって異なる植生と農産物(ペルー付近の模式図) 6000mをこえる高峰もあるアンデス山脈では、標高によって気候や植生が異なり、栽培される農産物の種類も異なっている。

▶⑤ 活気に満ちた日曜市のような(ペルー, クスコ近郊) アンデス山脈の高山都市では露天市がよくみられ、山高帽子をかぶった先住民の女性が農産物などを売り買っている。



▲⑥ リヤマとアルパカ アンデス特有の家畜で、高山に適した体のつくりになっている。毛や肉を利用するほか、リヤマは荷を運ぶためにも使われる。



現行高等学校「地理B」教科書の例(帝国書院)②

低地に住む 人々の生活

ーオランダー



▶① 広大な干拓地と風車 オランダの人々は古くから、干潮時に現れる陸地に堤防を築き、風車を使って海水を排水して、ポルダーとよばれる干拓地を広げてきた。



◀② 風車と運河でスケートをする人々 風車は、一年を通して吹く西からの風を利用するため西向きに建てられ、排水や製粉に利用されてきた。冬には水路が凍結しスケートが楽しめる。

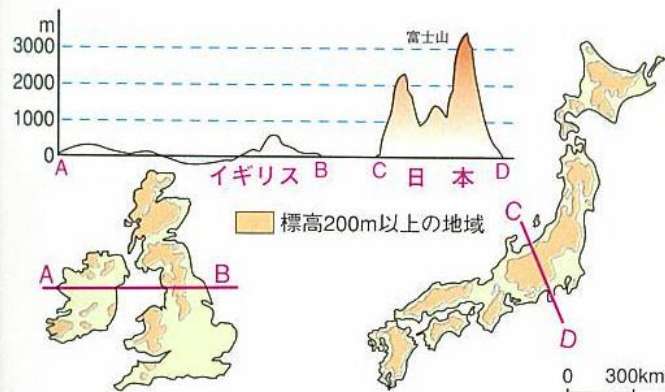
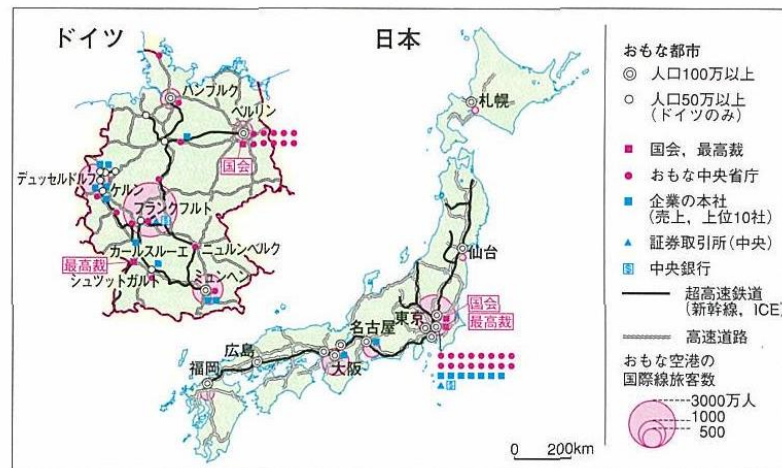


▶③ 運河の多い首都アムステルダム(1997年撮影)



◀④ 自転車に乗る人々(アムステルダム) 平らな土地の多いオランダでは、環境にやさしい自転車を利用する人が多い。歩道や車道とは別に自転車専用レーンも設けられている。

▶③ ドイツと日本の政治・経済機能の分布 **読図**
日本の政治・経済機能の集中のようすを、ドイツと比べて確認しよう。また、そのように集中する理由を、交通網とあわせて考えてみよう。



▲② 日本とイギリスの地形の比較 日本は山がちで急峻な山地が多いのに対し、イギリスではなだらかな山地や平野が多い。

出典: 高橋彰・平戸幹夫・片平博文・矢ヶ崎典隆・内藤正典・杉谷隆・松本淳・戸井田克己・友澤和夫 平成18年検定済『新詳地理B 初訂版』帝国書院

高等学校「地理B」教科書と国土教育①

ー 産業(農業等)が国土への働きかけであることの説明 ー

■「昭和31年検定済教科書」

⇒ 農業だけでなく、牧畜、水産、林業、そして工業に至るまで、教科書(経済地理分野)で取り上げられている全ての産業の最初の記述の部分で、それぞれの産業と国土(地理的条件)との関係がしっかり説明されている。

ー 交通の発達と機能に関する説明 ー

	記述内容	記述頁数
昭和31年 検定教科書	陸上交通(道路、鉄道)と 水上交通(内陸水路、 海上交通)が中心	14頁
昭和53年 検定教科書		6頁
現行の教科書	航空交通が中心	3頁

大幅に削減

高等学校「地理B」教科書と国土教育②

－ 国家についての説明 －

■ 「昭和31年検定済教科書」

- 「国はその国民をつくっていこうとする意欲と情熱をもっているものでなければならない。」
- 「国土としてまとまった統一あるものに組織されて行くには、国の力が問題となる。すなわち国の位置、形、大きさ、経済力、軍事力、その民族の文化的社会的な強さの総合されたものが国力である。」
- 「国力を決定づけるものとして、国土の広さと共に、国民人口とその素質および国民の国家意識があげられる。」

■ 「昭和53年検定済教科書」及び「現行の教科書」

⇒ 「国家」を論じる箇所はあるが、取り立てて紹介すべき内容は見あたらない。

高等学校地理教育が抱える課題

■ 中学校社会科の履修内容の減少による影響

- 中学校で遊ぶ世界地理は、中国、アメリカ合衆国、EUの一国のみ。
⇒ 「地理」に関心が無い高等学校入学生の増加

■ 学習指導要領(世界史のみ必修)の影響

- 「地理」の開講率および選択者数の減少
⇒ 「地理」履修者は、全生徒の半数以下に低迷

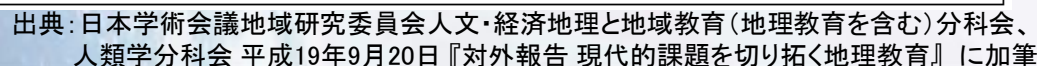
■ 大学入学試験の影響

- 私立文系:「地理」では受験できない大学・学部が多い。
- 国立文系:地理歴史科から2科目を課す大学・学部は稀。
- 私立理系:「地理」は受験科目外。

⇒ 「地理」履修者の多くは理系の生徒。しかもセンター試験対策としての色が濃い。

■ 教員養成上の問題

- 「地理」を専門とする教員の減少
⇒ 高等学校で「地理」を履修せず、大学でも専門として「地理」を学んでいない教員が、「地理」の面白さを授業で伝えることは困難。



地理歴史教育復権に向けた取り組みと今後の展望

■ 大学入試科目と高等学校履修科目の増加

- 大学(文系学部)の入試科目数を増やし、「地理歴史科から2科目以上選択」を標準化
- 高等学校学習指導要領を見直し、地理、世界史、日本史の3科目必修化

■ 地理歴史教育全体の底上げ

- 「地理歴史に関する総合的な科目の設置」(H20.1 中教審答申)の検討
- フランスやイギリスの教育内容や教育システムに学ぶ
⇒ 暗記科目としての地理歴史科から脱却し、歴史的な視野(時間軸)と世界的な視野(空間軸)を持って「現在を如何に生きるか」を考えることの出来る「日本人」育成のための教育科目へ

■ 高質な教育者の育成と幅広い実践

歴史の深層としての「国土」 = Fernand Braudelの『地中海』に学ぶ



「歴史地理学」と『国土教育』の概念

■ Fernand Braudelの歴史認識

- 「自然環境」(≡「国土」)を、人間の尺度(人間集団の尺度、人間社会の尺度)で見つめ直すことが、真の歴史学「歴史地理学」である。

■ 「歴史地理学」こそ『国土教育』の骨格

- 歴史の目で見るとこそ、「国土」と人間との関係が、一步引いた目線から俯瞰的に見える。
- 例えば、人間と距離との戦いが「交通」であることは、現在の目線からのみでは、明確に読み取ることはできない。
- だからこそ、如何に「国土」が人間にとって重要で、「国土」への働きかけと「国土」からの恵みの相互作用によって人間の生活が保たれているか、人類の幸せが担保されているかということを、われわれは深く認識しなければならない。＝『国土教育』の実践

⇒ 初等・中等地理歴史科教育に携わる者の責務

⇒ 大学・大学院で土木工学を学び、社会に出て国土整備・国土管理に携わる者の責務

高等学校「歴史(世界史)」教科書の改善提案

= Braudelの世界史教科書『文明の文法』から学ぶ

■ 取り扱う対象の違い

- **文明**(信仰、人間科学、自然科学、哲学、芸術、工業技術等)、及びこれらの基礎構造としての**人間集団、民族、都市、交通、国家、空間**(=自然環境)を中心に扱う。

■ ストーリーの違い

- **文明単位、大陸単位、国家単位**で章・節立てがなされ、それぞれの空間領域の中で、過去から現在までの時間軸に沿ってストーリーを展開。⇒ **歴史とは文明ごと、国家(地域)ごと、民族ごとに見ようとしなければ、殆ど意味をなさない。**
- ヨーロッパ文明は、過去(395年)から現在に至るまでずっと、キリスト教と二人三脚で歩んでいるのであり、アメリカ合衆国は典型的なプロテスタント国家

■ ヨーロッパの位置付けの違い

- 全体頁数に占める**ヨーロッパ(西欧)**の記述分量は、山川出版教科書が42%(143頁/340頁)と過半数近くを占めるのに対し、ブルーデル教科書では**極東の27%**(139頁/507頁)に次ぐ**23%**(116頁/507頁)という扱い。
- しかし、自国フランスが、フランス人こそが、世界史の中において、政治・文化の主導的役割を果たしてきたのだということを書き込み。

日本とは・・・

■ フェルナン・ブローデル

- 「きわめて早く6世紀頃から**中国的日本**とでもいうべきものが存在してきたし、1868年からは**西洋的日本**がはじまり、その大成功は内外から認められている。小庭園と茶道と満開の桜の国では、中国経由で伝来してきた仏教でさえも日本風につくりなおされてしまう。」 ⇒ 「**日本的**」日本

■ ラザフォード・オールコック(初代駐日イギリス公使)

- 随所で**日本の景観の美しさ**に心底驚き、小田原から箱根に至る**道路の「比類のない美しさ」**にさえ目を奪われた
- 「**日本の農業は完璧に近い**。自分の**農地を整然と保つ**ことにかけては、世界中で日本の農民にかなうものはない」

■ タウンゼント・ハリス(初代駐日アメリカ公使)

- 「私はいままで、このような**立派な稲**、このような**良質な米**を見たことがない」

⇒ 『**国土教育**』の材料として有用

内村鑑三『デンマルク国の話』より

【あらすじ】 1864年のプロシア・オーストリアとの戦いに敗れ、肥沃な南部2州を奪われたデンマークが、工兵士官ダルガス父子の努力によって国土の過半を占める不毛の荒野「ユトランド」への植林に成功し、小国ながらも豊かで平和的な国家として再建した話

今、ここにお話しいたしましたデンマークの話は、私どもに何を教えますか。

第一に戦敗かならずしも不幸にあらざることを教えます。国は戦争に負けても亡びません。実に戦争に勝って亡びた国は歴史上けっして少ないのであります。**国の興亡は戦争の勝敗によりません、その民の平素の修養によります。善き宗教、善き道徳、善き精神ありて国は戦争に負けても衰えません。(中略)**

第二は天然の無限的生産力を示します。**富は大陸にもあります、島嶼にもあります。沃野にもあります、沙漠にもあります。大陸の主かならずしも富者ではありません。小島の所有者かならずしも貧者ではありません。善くこれを開発すれば小島も能く大陸に勝さるの産を産するのであります。(中略)外に拡がらんとするよりは内を開発すべきであります。**

第三に信仰の実力を示します。**国の実力は軍隊ではありません、軍艦ではありません。はたまた金ではありません、銀ではありません、信仰であります。(以下略)」**

本稿で云いたいこと

= 「人」と「国土」と「信仰・教育」の重要性

- 自分は歴史の最先端に立っていて、その自分が未来を切り開いていかなければならない、覚悟をもって前を向いて生きていかなければならない
⇒ 「自由」に生きる個人、自立した「国民」の育成
- 歴史の深層には「国土」というものがあって、これを絶え間無く改善していかなければ、歴史の表面にある経済的出来事や政治的出来事を本質的に変えていくことはできない
⇒ 「国土」への気付き、「国土」への働きかけ
- これらの実現のためには、**信仰心に根ざした教育**が不可欠である(自利利他、隣人愛、・・・)

詳しくは、JICE REPORT 第16号・第17号をご覧ください。